

令和6年度「進路対策研究会」重心調査抜粋版

重症心身障害児童生徒(以下重心児)と医療的ケア児童生徒(以下医ケア児)に関する調査。調査対象は、神奈川県内の特別支援学校(高等特別支援学校を除く)・支援学校の横浜市在住の児童生徒。調査期間は令和6年7月から8月。

1. 重症心身障害児童生徒数・医療的ケア児童生徒数

＜学年別＞ 参照:進路調査(重心調査)結果 P1

卒業年度	R5	R6	R7	R8	R9	R10	R11	R12	R13	R14	R15	R16	R17
現在の学年		現高3	現高2	現高1	現中3	現中2	現中1	現小6	現小5	現小4	現小3	現小2	現小1
在籍生徒数	819	835	777	771	1064	1129	1267	1532	1706	1982	2104	1890	1838
重心児童生徒数	50(61)	53(51)	41(53)	49(36)	43(47)	46(47)	39(48)	34(47)	34(33)	46(35)	63(45)	36(61)	49
医ケア児童生徒数	20(26)	30(22)	22(29)	27(23)	22(27)	23(26)	23(26)	18(22)	24(19)	17(23)	31(18)	17(37)	19

※在籍生徒数：令和6年9月時点の速報値 ※ () 内数字：1年前の人数

○特別支援学校に在籍している児童生徒が増加する中でも、重心児や医ケア児の割合は、重心児は全体の6%前後、医ケア児は、2~3%前後で推移している。年を重ねる中で、新たな医療的ケアが必要になったり、より高度な医療が必要になったりと、医療依存度は高まっていく傾向がある。知的障害のある方が多く通う特別支援学校に、重心児や医ケア児が一定数おり、医療的ケアまで至らなくても、ミキサー食の対応が必要な方がいることから、重心児や医ケア児について、調査内容を精選しながら、推移を見守っていく必要がある。

○特別支援学校を卒業する生徒が1000人を超えるまで後3年となり、重心児医ケア児も併せて対応が必要である。

＜居住区別＞ 参照:進路調査(重心調査)結果 P2 *高3~小1合計

	人数の多い区・人数					
重症心身障害児童・生徒数	戸塚	46	鶴見	43	青葉	42
医ケア児童・生徒数	戸塚	26	南	23	港南	22

○上位の区が取り分け多いのではなく、昨年同様、重心児や医ケア児が市内全域に一定数居住している。

○マンションの増加等で人口が増えている区が重心児も医ケア児も多いが、両者が利用できる資源が乏しいことが課題となる。実生活を支える資源に限りがあると、重心児や医ケア児は通所を叶える条件がより厳しいものとなる。

2. 移動が自立している医療的ケア児童生徒数(以下移動自立医ケア児)※参照:進路調査(重心調査)結果 P3

高3~小1合計	46名(医師の指示書のある座薬対応:17名、吸引:9名、経管栄養:9名、気管切開:7名等)
---------	---

※医療的ケアがあり、運動障害が軽度(主な移動手段が「手動車椅子介助」以外)の児童生徒

○調査をはじめて40~50名程の移動自立医ケア児がいる状態が続いている。昨年の調査から吸引、経管栄養、気切が半数になっていることから、前年度の医療度高さが伺える結果となった。移動自立医ケア児は、重心児の中でも限られた存在になるものの、医療的ケアがあるために進路選択が限られる方が一定数おり、今後の推移を引き続き把握していく必要がある。

3. 令和5年度卒業生の進路結果 参照:進路調査(重心調査)結果 P4~6

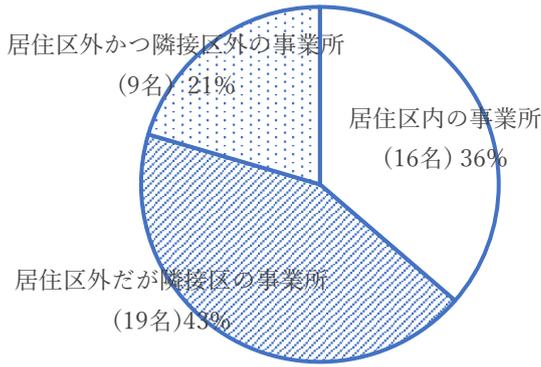
＜通所状況＞

調査対象卒業生	52名(61名)	
並行通所	24名(2か所:23名、3か所:1名)	46.1%
進路未決定者数※	7名	13.4%

※進路未決定者数…通所希望日が叶わず、進路未決定日がある場合の生徒数(例:週5日通所希望していたが、週3日しか決まらなかった)

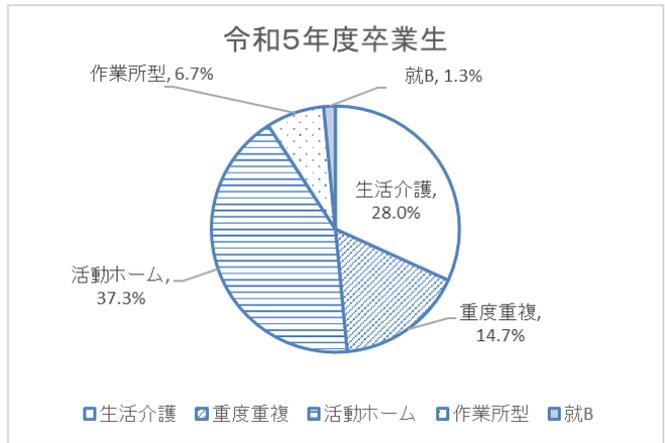
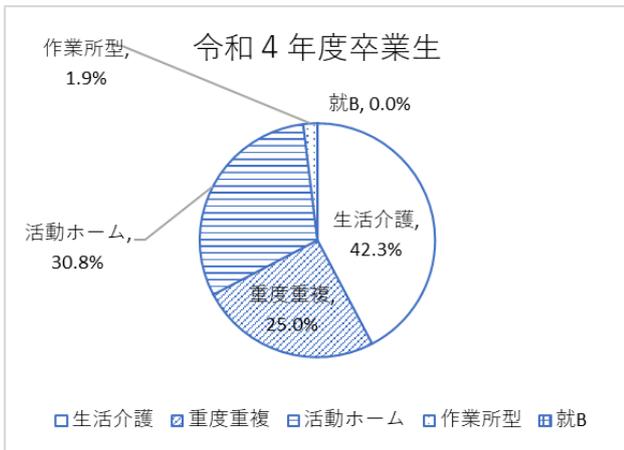
○昨年より並行通所者が減って、1つの事業所で通所を叶えている方が増えている状況にある。一方で進路未決定が年々増加している。

＜居住区と事業所所在区の比較＞ ※入所6名、その他2名除く



- 居住区内の事業所に通所できているケースが大幅に増えている。前述の並行通所の数値も併せて、昨年度はご自宅の近くで進路選択が叶った方が多いことが分かる。
- 通所先の選択にあたっては自宅の立地(区外でも近い、区内でも遠い等)や本人の希望に帰するものの、重心児や医ケア児が通所するにあたっては、体力面や送迎体制での課題があるため居住区内で選択肢がより広がることが望まれる。

＜種別内訳＞



- 作業所型や就B利用が増え、重心児や医ケア児の就労へのニーズの高まりが感じられた。
- 地域活動ホームへの通所が大幅に増えている。前年度、幼少から各区の基幹相談支援センターに支えていただき、進路選択の一翼を担っていただけたケースがあり、学校と基幹が連携して、進路を進めていく重要性が伺えた。

4. 高校3年生数と受け入れ事業所数 参照:進路調査(重心調査)結果 P2~3、令和7年度新規受け入れ状況調査

	鶴見	神奈川	西	港北	保土ヶ谷	旭	戸塚	泉	瀬谷	中	南	港南	磯子	金沢	栄	緑	青葉	都筑	合計
高3:重心(人)	5	3	0	1	2	7	2	1	3	3	5	1	2	4	2	5	3	4	53
高3:医ケア(人)	3	1	0	1	1	5	1	1	1	1	3	1	0	2	1	3	2	3	30
高3:重心かつ医ケア(人)	3	1	0	1	0	1	4	1	1	1	1	2	1	0	1	3	2	3	26
令和7年度 新規受入調査回答事業所数	84	56	32	50	49	53	46	78	31	62	28	32	37	24	20	33	30	57	802
重心:受け入れ可	4	9	2	9	1	9	8	10	9	7	3	4	3	4	4	5	4	11	106
医ケア:受け入れ可	0	2	1	2	0	1	0	3	2	1	2	3	0	0	2	2	1	5	27
重度重複と医ケア:受け入れ可	0	2	1	2	0	1	0	2	2	1	2	3	0	0	2	2	1	5	26

- 重心かつ医ケアの高校3年生は、26人。令和7年度新規受け入れ状況調査に回答のあった事業所のうち、重心と医ケアの受け入れ可能な事業所は26か所あるが、7か所は受け入れ人数が「要相談」となっている。

【まとめ】

特別支援学校を卒業する生徒が増えていく中で、各区において対策を練っている状況にあるものの、1000人卒業時代に向けて進路の選択肢が十分であるとは言い難い。特段、重心児と医ケア児について、本人らしく進路選択ができるよう各区の資源の見直し、福祉就労の併用等を模索し、個々のニーズ(医療依存度の高まりや障害の状況等に合わせたサービスの移行等)に即した関係各所の取り組みが急務の課題である。重心児と医ケア児は全体からみても、数は少なく、調査においても、母数が少ないことから、年ごとの増減が結果として数値に出にくい状況にある。障害の状況が多様化している中、調査項目をニーズに合わせながら、引き続き推移を見守っていききたい。